

東日本大震災 負けるなニッポン!

フェイスブックで広がる支援の輪

～在日ロシア人グループ「ストップ・パニック」の活動

モロゾフ・デニス

03 月 15 日。ダイヤの乱れで超満員の電車を長時間乗り継ぎ、やっとの思いで辿り着いた事務所で俺を待っていたのは訪日旅行キャンセルの嵐。平常心を装いながらメール処理に没頭しようとするが、頭は福島第一原発事故で一杯。水素爆発、放射線被爆、諸外国大使館の東京からの撤退、コンビニから消えていく水、カップ麺、……。震災時、海外ニュースでよく見かける暴動や略奪はなかったものの、「静かなるパニック」は東京を確かに呑み込んでいた。しかし、俺の周りにいた人たちは冷静さを保ち、懸命に仕事をこなし、自分よりも被災者を思いやる。この素晴らしい環境は「大丈夫、すべての問題はきっと解決される。慌てふためく必要はない」とささやいているようであった。そして数日も経たないうちに電車が普通に動き始め、水や日常生活用品がコンビニの棚に舞い戻った。「静かなるパニック」はほんの一瞬で立ち去った。

「ストップ・パニック」グループの誕生

こんな経験は自分だけでなく、日本に住んでいる多くのロシア人も同様にしていた。そしてこの経験を生かして、情報交換の場・助け合いの場として誕生したのが、フェイスブックをベースにした「ストップ・パニック」グループだ。

震災後、ロシア人に限らず、多くの在日外国人が真っ先に受けたのは、本国の肉親や友達からの強力なプレッシャーだった。ロシアに限っていうと、マスコミの報道は尋常なものではなかった。大衆向けの新聞や雑誌はあることないことを書きたて、キー局ですら事実無根の報道を連発していた。「放射線の雲で東京はゴースタウンに化す」、「東京で計画的避難が開始」など、目や耳を疑うような「ホットな」ニュースが飛び交っていた。仙台市内の地震発生時の映像に「東京は崩壊寸前」のコメントを乗せた「情報」が連日流されると、実態を知らない肉親や友たちはすかさず電話やメール攻撃を始める。「今すぐ逃げろ」、「帰ってこない」と勘当だ。あるロシア人女性の場合、娘を帰国させるために重い病を装うといった「奥の手」を使った母親までいた。

いくら「大丈夫だ」と言っても「じゃ～、その根拠を示せ。政府はどうせウソの発表しかしないんだ」と跳ね返ってくる。長年に渡って自国の政府に騙されてきたロシア人は「世

界中の政府はどこともウソツキだ」と信じ込んでしまっているから、なんともやるせない。

正確な情報を求めて 1000 名以上が集まる

フェイスブックの「ストップ・パニック」グループに集まったのは、外からの圧力をかわしきれず、正確な情報を求めていたロシア人やその他の外国人だった。すぐに帰国すべきなのか、原発事故は今どうなっているのか、放射線は一体どういうものなのか、空気、食材、水は安全なのか。みんな



グループのイベントでオークションに出された「パニック・グッズ」の一部。売上げがすべて寄付。

などで寄せ集めた情報を日本政府の公式発表や東京電力と原子力安全保安院の記者会見の内容、さらに IAEA のような国際機関の見解に照らし合わせながら、一つ一つの疑問に答えていく。当初、グループの役割はそのようなものだった。正確な情報に基づき、

あらゆる懸念事項をできるだけ分かりやすく整理した「ドキュメント」と呼ばれるフェイスブック内のノートを 100 件以上作成し、それをグループの参加者に公開した。すると数十名の参加者はあつという間に 1,000 名以上に膨らんだ。

数は力なり。

数多くのロシア人はグループの情報を武器に肉親からの「防衛」に努めた。フェイスブックで発信した日本情報を英国 BBC のロシア語放送が紹介してくれるなど、ロシア国内への正しい情報発信にも役立った。そして情報戦が収束に向かうと、次は「被災地の支援と募金活動」という大きなキーワードが浮かび上がった。

被災地でロシア料理の炊き出し、ミニコンサートも計画

「ストップ・パニック」が主催した数回のチャリティー・イベントに沢山の人が集まり、その参加費すべては日本赤十字に振り込まれた。福島第一原発で、過酷な環境で、寝食を忘れ、必死に頑張っている東京電力の復旧作業員宛てに 263 名の署名を集め、激励の手紙も出した。これをきっかけに NHK 首都圏ネットワークがグループの活動を取材し、放映してくれた。

フェイスブック内にある別の支援グループ「Support for victims of Japan Tsunami」の呼びかけに応じ、人道支援が十分に行き渡ってない石巻と南三陸の避難所あての食



支援物資を整理している
グループメンバー

料品や日常生活品の調達に協力し、ロシア大使館まで動かし、2トン近くの物資を共同で 06 月 04 日に届けた。

そして 06 月末には、この

二つのグループの参加者は再び被災地を訪れ、ロシア料理の炊き出しとミニ・コンサートを行う計画を立てている。

外国人の枠を超え、現時点では日本人の参加者も増えている。グループ内の共通言語はロシア語がもちろんだが、日本語も英語も問題ない。

グループの活動に興味のある方は、フェイスブックに登録の上、「STOP PANIC」と検索してみてください。あなたが出した支援のアイデア、呼びかけが 1,000 人の参加者を動かすかもしれない！(JIC スタッフ)

ウラジオストク歴史散歩地図

面白い地図ができた。「浦潮旧日本人街散策マップ」。ウラジオストクの日本領事館とアルセーニエフ歴史博物館が、日本ウラジオストク協会(中本伸幸会長)や藤本和貴夫氏(大阪日露協会理事長)らの協力を得て作成したウラジオストクの歴史散歩地図だ。

ウラジオストク市街中心部に点在する旧日本人街の跡や日本人ゆかりの建物などを地図上に記したもので、裏面にはそれぞれ解説と写真がついている。旧日本総領事館、浦潮本願寺跡、旧日本人小学校、旧杉浦商店など、十数か所の名前が見える。

ウラジオストクは、1860 年に清国からこの地域一帯を獲得したロシア帝国が、極東開発の拠点として、また太平洋への出口として建設した港町だ。1904 年には中国のハルピンを経由してモスクワまでつながるシベリア鉄道が開通し、ウラジオストクはその始発駅となった。シベリア鉄道は、日露戦争(1904~1905 年)のために帝政ロシアが国力をあげて建設した世界一長い鉄道路線だが、開通後はアジアとヨーロッパを結ぶ最短交通路となった。もう 100 年も昔の話になるが、『東京発パリ行き』の国際列車のチケットが、日本で売られていた時代があったのだ(1912 年から運行開始)。東京を出た列車は、敦賀港(福井県)でウラジオス

トク航路と接続し、ウラジオストクからシベリア鉄道でモスクワに到着、さらに西へと走りパリまで約 2 週間で行くことができた。

ヨーロッパへの窓口とも言えるウラジオストクには、早くから多くの日本人が出かけており、明治 9 年(1876 年)に日本政府貿易事務所が開設されている。最盛期(1920 年頃)には、市の中心部に日本人経営の商店が建ち並び、約 6000 人の日本人がこの町で暮らしていたという。

ロシア革命(1917 年)後の「シベリア出兵」で、ウラジオストクには、日本、イギリス、アメリカなどの干渉軍が長期間駐留した。その間、ウラジオストクには、革命政権から逃れた多くのロシア人が流れ込み、また干渉戦争に乗じて一旗揚げようと目論む日本人が多数乗り込んだ。しかし、シベリア干渉戦争は失敗し、最後まで残った日本軍も 1922 年 10 月に撤収、ウラジオストクは赤軍の支配下に入った。

結局、ウラジオストクの日本人街が最も栄えた時期は、日本軍のシベリア出兵(1918~22 年)、干渉戦争中ということになるのだが、苦労してこの地でビジネスや生活の基盤を作りあげてきた日本人たちは、戦争中は日本軍に協力させられ、その失敗後はソビエト政権から圧迫されて徐々に締め出されていくことになる。ウラジオストクから最後の日本人が引き上げたのは 1927 年のことと言われる。以来、1991 年のソ連崩壊まで、ウラジオストクは外国人立ち入り禁止の閉鎖都市として、日本との関係を長らく断ち切られてきた。

ソ連崩壊以後は、閉鎖都市の指定が解除され、新潟ーウラジオストク間に定期航空路が開かれ(2010 年からは成田ーウラジオストク航路に変更)、今や多くの日本人が観光で訪れる町になっている。天然の良港である金角湾を抱くように町が広がる。坂道の多い市街には帝政時代からの古い建物が並び、「路面電車」が道を行きかう。2012 年 11 月には APEC 首脳会議が開催される予定で、現在、会場となるルースキー島への架橋工事が急ピッチで進められている。

かつて日本人が暮らしていた痕跡を訪ねて、地図を片手にウラジオストクの町を歩いてみると、また違った表情が見えてくるかもしれない。(浦潮旧日本人街散策マップ)は、在ウラジオストク日本領事館またはアルセーニエフ歴史博物館で、無料配布しています。

* * *

「浦潮旧日本人街散策マップ」の編集に協力した日本ウラジオストク協会は、2007 年 2 月に設立された民間団体で、日本各地とウラジオストク市を結ぶ文化・芸術・経済交流を行うことを目的に、美術展やコンサートなど、さまざまな活動を行なっている。

連絡先;156-0052 世田谷区経堂 5-8-5 中本方

TEL/FAX; 03-3425-6183 URL; www.geocities.jp/biennale2007/